

## ブックレポート

*Fostering Positive Cross-Cultural through Language Teaching* by  
David E. Ingram, Minoru Kono, Shirley O'Neill & Masako Sasaki  
(Post Pressed, 2008)

はじめに

昨年夏の話になるが、著者の一人である佐々木雅子先生の「第二言語習得論」の授業の一環で、受講生が3人1組になり、あるテーマに関して英語でプレゼンをする、というイベントが夕方に行われたことがあった。そのイベントに参加した私は、普段の授業ではなかなか見ることのない光景を目にすることができた。というのも、イベントには秋田県内の中学校や高校でALTを務める若い外国人の男性が数人、教室の真ん中の一番前の席で発表を聞いていたからである。彼らはプレゼン後の質疑応答の時間になると必ず一言二言（時にはそれ以上に）発言し、発表を行った学生たちは、彼らの質問や感想に（身振り手振りを交えて）一生懸命答えようとしていた。

このやりとりを見ていた私は、「こういう授業は学生のコミュニケーション能力を鍛えるのにとっても有効だ」と思ったが、それ以上に、このような形の授業を実現させた佐々木先生の行動力に驚きを感じた。ALT、それも複数のALTが、大学の授業に参加するというのは普通まず考えられないことだからである。「どうやって彼らに来てもらえる環境を作ったのだろう?」「これを実現するのにどれだけの労力が必要なのだろう?」という疑問が湧くと同時に、「一体何が先生をここまで動かすのだろうか?」と、先生の動機に強い興味を感じた。

この最後の疑問については、お尋ねするのはあまりにも失礼と思ったこともあり、これまで先生にお伺いすることはなかった。が、最近、疑問を解く鍵が見つかった。それが、ここで紹介する *Fostering Positive Cross-Cultural through Language Teaching* である。

### 本書の概要

本書は、言語教育の中で異文化に対する望ましい態度をどう養成するか、というテーマで書かれたもので、8つの章で構成されている。第1章では、“attitude”という用語の定義や異文化への態度の重要性に言及した後で、異文化に対する態度の育成が、ユネスコやヨーロッパ連合などの組織、国あるいは地域レベルの言語教育政策の中で目標の一つに掲げられていることを、日本やブラジル、クイーンズランド州（オーストラリア）の例を挙げて説明している。著者が様々な国や地域の言語教育政策に精通していることが伺える。

第2章では、言語学習の異文化に対する態度への影響を調査した先行研究について紹介している。異文化への態度の決定要因には様々なものがあるが、“background variables”（個人が育った環境に関連する要因）の影響がかなり強いこと、異文化への望ましい態度の育成には、異文化に関する知識だけでは不十分であり、異文化の人々との実際の交流体験や体験からの振り返りが重要であること、地域の異文化出身の人々との交流が有効であることについて、具体例を挙げて説明している。ここでは著者が、言語教育によって異文化へのネガティブな態度が育成される可能性に言及している点が興味深い。

第3章は、ブリスベンと秋田で行われた研究プロジェクトの概要を紹介している。ブリスベンの調査では、言語学習の異文化への態度に対する影響に焦点をあてた仮説が設定され、13～17歳の生徒598名及び教師24名がアンケートの被験者となった。一方、秋田の調査では、上述の影響に加え、異文化への態度決定要因の特定、海外経験の英語学習への影響に焦点をあてた仮説が設定され、14～19歳の生徒・学生636名及び教師47名が被験者となった。また、著者は第3章で、性別、年齢、言語学習歴（以上生徒に対して）、勤務校、指導歴（以上教師に対して）等、被験者の背景に関する情報にも言及しており、これらの記述から、研究プロジェクトのスケールの大きさだけでなく、細部への調査の綿密さが伺える。

第4章は、ブリスベンの調査結果の報告である。外国語の学習期間の長さは異文化への態度と相関がないこと、被験者（生徒）の異文化への態度は全体に好意的だが、詳細な調査から、アジア人やオーストラリアの先住民への評価は、自分自身や学習言語の話者、オーストラリア人、ヨーロッパ人、言語教師への評価に比べて低いことが報告されている。また、教室での活動に関して、教師の実践は、生徒の希望や教師自身が理想とする活動、異文化への態度の育成に重要と考えられる活動とはかけ離れており、（このような状態では）言語教育が異文化への態度にポジティブな影響を与えていないという結果は驚くことではないとコメントしている。

第5章は、秋田での調査結果の報告である。外国語学習期間の長さや英語圏への滞在経験、住んでいる地域、性別などの要因は異文化への態度と相関がないこと、被験者（生徒）の異文化への態度は全体に好意的だが、詳細な調査から、アジア人や自分自身への評価は、英語話者やヨーロッパ人、英語教師への評価に比べて低いことが報告されている。また、教室での活動に関して、教師の実践は検定教科書に基づいた伝統的な文法や発音のドリルが中心であり、コミュニケーションに焦点が当たっていないこと、実践の内容と教師が重要と考える言語教育の目標（英語母語話者との会話能力の育成や言語学習に対する積極的な態度の育成）の間のギャップが指摘されている。第4章と第5章の結果を比較すると、オーストラリアと日本の生徒の自己肯定感に大きな差がある点、教師の理想と実践のギャップが両国に共通している点は興味

深い。また、日本人生徒の英語（話者）への態度が、英語能力や経験の増加に伴って肯定的になる一方、アジア人や日本人への態度がより否定的になる傾向は懸念すべきことであり、今後の外国語教育のあり方を考える上で重要な発見と言える。今後この点に関するより詳細な調査を期待したい。

第6章は、ブリスベンと秋田の調査結果の検討及び結果の示唆について論じている。著者は、言語教育による異文化への望ましい態度の育成には、異文化に関する学習や体験、体験からの振り返りの他、学習者のニーズ、言語使用と場面の設定、多様な経験の機会の提供等に配慮した指導法の存在が必要であり、それを具現化した“Community Involvement”の実践を提唱している。また、小学校言語教育への示唆や、異文化への望ましい態度の養成に関する教師教育の重要性、Community Involvement の移民社会への影響にも言及している。

第7章は、異文化への態度の養成を目的に行われたプロジェクトとその結果の報告である。具体的には、On-Arrival Programme for Immigrants、College French、University Language Programme、Asian Student Exchange Program の4つのプロジェクトにおいてCommunity Involvementが異文化への態度の養成に有効であり、コミュニケーション能力の向上にも役立ったことが報告されている。また、交流相手である地域の学習言語話者への好影響や、担当した教師の反応（負担に感じた教師もいたが、全体的には好意的に受けとめられた）など、指導法の副次的効果にも言及している。

第8章は、本書の結論である。今後の研究については、長期間に渡る調査や、短期留学の効果の検証、社会状況が異文化への態度に与える影響の調査、言語学習の経験のない生徒との比較調査等が重要と指摘している。また、結びの部分では、異文化への態度の育成は現在の多文化社会における重要課題の一つであり、言語教育及びそれに携わる教師は、そのような態度の育成に貢献する義務があると述べ、指導法の改善の必要性を示唆している。

おわりに

本書を読みながら、佐々木先生の取り組みは、Community Involvement の実践そのものであったことに気づかされた。英語教育に限らず、教育の世界では「理論と実践は違う」ということが当たり前のように言われるが、それは理論には現実の制約が存在しないからであろう。しかし、中学校や高校程ではないにしろ、大学にも現実の制約は存在する。理論の実践には環境の整備が必要で、それには大変な労力が伴う。それを何事もなかったかのように平然(?)と、しかも継続的に実践されている先生に、改めて頭の下がる思いがした。

本書をこれから読まれる先生方、また将来教師を目指す学生の皆さんには、日本という言語

学習に制約の多い(多すぎると言い切っても過言ではない)環境の中で、Community Involvementを意識した実践がどの程度まで可能なのか、ぜひ積極的な検討をお願いしたい。著者の思いはその一点に集約されるのではないか、そう(本書を読み終えて)感じた次第である。

#### 本書の著者について

現在私が一緒に仕事をする機会の多い佐々木先生の話ばかりになってしまった(Ingram先生、幸野先生、O'Neill先生、どうかお許し下さい)が、本書は4人の著者によって書かれている。David Ingram氏は現在メルボルン大学のHonorary Professorial Fellowで、調査実施時にはグリフィス大学教授。秋田英語英文学会ではIngram先生が2000年8月に秋田大学で講演したことを記念して「来秋記念特別号」(2001年3月)を発行している。

幸野稔氏は現在秋田大学名誉教授で、調査実施時は秋田大学教育文化学部教授。本学会では以前副会長を務められ、現在は顧問として、本学会や秋田の英語教育に大きな貢献をされている。なお幸野先生は中学校検定英語教科書*Sunshine English Course*の著者の一人でもある。

Shirley O'Neill氏はサザンクイーンズランド大学准教授で、調査実施時はSenior Research Fellow。佐々木雅子氏は現在秋田大学教育文化学部教授で、調査実施時は秋田大学医療技術短期大学部助教授。

(若有 保彦／秋田大学教育文化学部准教授)